島田忠臣の交友と白詩

廖　栄発

島田忠臣が『白氏文集』から詠作の発想や表現などを多大に得ていることについては、すでに様々な指摘[1]がある。本稿では、先学の驥尾に付して、『田氏家集』の交友詩の検討を通して、忠臣がいかに白詩を利用し、自らの交友世界を綴りあげてきたかを一側面ながら提示したい。

一、藤原基経との交友

忠臣は古くから藤原基経に近侍したらしい。両人の親しい間柄は『田氏家集』からも確認できるが、忠臣は基経との交友関係を描く時に、白詩に見られる裴度関係の詩文を参考にしているのではないかと筆者は考えている。

例えば元慶七年（八八三）、美濃介として赴任する忠臣に乗用させるため、基経は馬を贈った。忠臣は「元慶七年春、大相賜二文馬一、有レ感自題」（巻中・107[2]）という詩を詠じ、詩題の下に「于時赴任美濃、故令騎去[3]〈時に美濃に赴任す。故に騎去せしむ〉」と自注を付けている。詩題にみえる「大相」は即ち「大相国」（太政大臣の唐名）の基経を指す。

毛頭細膩又調馴　毛頭は細くして膩し又た調馴せり
更頼恩深剪払新　更に恩の深きを頼りて剪払新なり
黒白班文難取像　黒白の班文は像を取ること難し
丹青妙画拙図真　丹青の妙画も真を図くこと拙し
鬣花偏恐行霑雨　鬣の花は偏に恐る　行きて雨に霑れむことを
蹄玉猶嫌踏著塵　蹄の玉は猶し嫌ふ　踏みて塵を著

人馬同時応別主　　人馬時を同じくして主に別るべし
望於華殿一嘶春　　華殿を望みて一たび春に嘶く

前の三聯は贈与された馬の素晴らしさを讃えている。尾聯では、馬が旧主との別離のため悲しい嘶きをあげていることが描かれていると同時に、基経に対する忠臣の惜別の意も述べられている。すでに『注』に指摘されているように、この詩の表現などは、左に掲げる白居易の「和三張十八秘書謝二裴相公寄一レ馬」（『文集』巻十九・1211(4)）に類似する点が多い。

歯斉臕足毛頭膩　　歯斉しく臕足り　毛頭膩し
秘閣張郎叱撥駒　　秘閣の張郎　叱撥の駒
洗了頷花翻假錦　　洗ひ了れば　頷花　假錦を翻し
走時蹄汗蹋真珠　　走る時は　蹄汗　真珠を蹋む
青衫乍見曾驚否　　青衫乍ち見て曾ち驚くや否や
紅粟難賒得飽無　　紅粟賒り難く飽くを得るや無や
丞相寄来応有意　　丞相寄せ来る　応に意有るべし
遣君騎去上雲衢　　君をして騎り去りて雲衢に上らしめん

詩題から知られるように、この詩は、張十八秘書が裴相公から馬を贈られたのを感謝した詩に和するものである。裴相公は、当時の宰相裴度のこと。裴は三年前の元和十二年（八一七）に、淮西節度使の反乱を平定したことにより、朝野の尊敬を受けている。一方、張十八秘書は、当時秘書郎を担当している張籍のこと。張は楽府詩の巨匠として名高く、白居易の親しい詩友である。(5)

白詩の前半は馬に関する描写であるが、首聯の「毛頭膩」は忠臣詩の「毛頭細膩」とほぼ同じ表現であり、また、明らかに忠臣詩の頸聯も白詩の頷聯を参考にして詠ったものであろう。そして、尾聯では、馬の贈与者の裴度に抜擢され、張籍がとんとん拍子に出世するだろうと白居易は詠っているが、傍点の「騎去」は上述した忠臣の詩題の自注にも見られる措辞である。

馬関係の白詩を参考にして詠作するのは自然ではあるが、『白氏文集』には「公垂尚書以二白馬一見レ寄、光潔穏善、以レ詩謝レ之」（巻六十七・3399）など馬関係の詩があるものの、忠臣がそれらを利用せず当該白詩を利用するのは、やはり基経を裴度に擬しているからではなかろうか。

こうした選択基準は、忠臣の「大相府東庭貯レ水成二小池一、小池種二一紫藤一、至二於今春一始発二花房一、酌二於花下一翫以賦レ之　応レ教」（巻下・131）からも確認できる。二首あるが、原文は左の通り。

①重華累葉種相依　重華　累葉　種相ひ依れり
池上新開映晩輝　池上新に開きて晩輝に映ず
料量紫茸花下尽　料量す　紫茸　花の下に尽くるも
家香更作国香飛　家香は更に国香と作りて飛ばむ

②一種垂藤数尺斜　一種の垂藤　数尺斜めなり
雖新雖旧是同家　新と雖も旧と雖も是れ同家
久来用意依芳蔭　久来　意を用ゐて芳蔭に依れり
不向人間趁百花　人間に向かひて百花を趁はず

この二首は、いずれも基経邸の東庭の池の中にある紫藤を主題とし、基経を中心とする藤原家の栄耀栄華を讃美している。一首目の承句と転句は夕暮れの藤花を詠っており、明らかに白居易の名句「惆悵春帰留不レ得／紫藤花下漸黄昏」（『文集』巻十三・631「三月三十日題二慈恩寺一」）を踏まえているが、藤を詠う主旨でこのような白詩利用は自然であろう。しかし、従来指摘されていないが、左に掲げる白居易の「春和二令公緑野堂種レ花」（『文集』巻六十六・3255）と忠臣詩との類似も注目すべきだと思う。

緑野堂開占物華　緑野堂開かれて　物華を占め
路人指道令公家　路人は指さし道ふ　令公の家と
令公桃李満天下　令公の桃李は天下に満つるに
何用堂前更種花　何ぞ堂前に更に花を種うるを用ゐんや

この詩の韻字の「家・花」は忠臣詩の二首目と同じものである。詩題の「令公」は中書令・裴度のこと。「緑野堂」は洛陽にあり、晩年の裴度が悠々自適の生活を送っている別荘である。白居易と劉禹錫らもよく緑野堂を訪問し、裴度と詩酒を楽しんだりしている。詩の転句には、初唐の名相狄仁傑に関わる典故が用いられている。狄は生涯にわたって、朝廷に数多くの人材を推薦したため、「天下の桃李、悉く公の門に在り」と称賛されている。白居易はこの典故を用いて、「（裴度）殿の門下にはすでに桃李が満ちているのだから、今更この緑野堂の前に花を植える必要はないだろう」と、裴度のことを讃美している。これは忠臣詩の一首目の「家香更作国香飛」（藤原家の藤の花の香りは天下に満ちている）の述懐や、二首目の「雖新雖旧是同家」（新しい藤も旧い藤もみなこの家の庇護下にある）の詩想などに、ヒントを与えたのではないだろうか。

右に述べてきた詩はその主題が馬や藤花であるけれども、基経との付き合いという視点からみれば、忠臣は白詩の中の、基経の地位と対応する裴度と関連のある詩作を参考・利用しているとも見えるだろう。己が詠じたい人物と対応する関連白詩を参考・利用するという忠臣の白詩利用

傾向は、次に述べる悼亡詩からも窺える。

二、忠臣の悼亡詩にみえる交友

晋の大文人潘岳が亡き妻を偲ぶ「悼亡詩三首」を詠って以来、「悼亡詩」は狭義には妻の死を悲しむ詩を指すが、広義には亡くなった人の死をいたみ悲しむ詩を指すこともある。[6]『田氏家集』には、弟良臣の死を悲しむ「哭二舍弟外史大夫一」（巻中・097）や、亡き友人のことを夢に見て悲しむ「夢二高侍郎一」（巻中・087）、橘広相の死を悲しむ「傷二左尚書一」（巻下・153）、また基経の愛馬の死を悲しむ詩に唱和する「奉レ和三大相傷二桃花馬一」（同120）など、広義の悼亡詩が散見している。これらの悼亡詩には、白詩の影響も見られるが、まず「同三高少史傷二紀秀才一」（巻下・191）という詩を掲げてみたい。

逝水争流不再廻　逝水　争ひ流れて再びは廻らず
文華凋落豈重開　文華　凋落して豈に重ねて開かむや
為君泣送千行涙　君の為に泣きて送らむ　千行の涙
莫恨泉途作雨来[7]　恨むこと莫かれ　泉途に雨と作り来らむことを

紀秀才を悲しんで大量の涙がそのまま地下に落ちて雨となり、黄泉の客となる紀秀才を驚かすという後半二句の発想はユニークである。[8]承句の「文華」は詩文の美しさを花によそえ、凋落した花は再び開かないこと、流れていった水は二度と戻ってこないこと、いずれも詩才の高い紀秀才の帰らざることに喩えている。こうした比喩の組み合わせは、白居易の「過二元家履信宅一」（『文集』巻五十七・2799）という悼亡詩にも見られる。

鶏犬喪家分散後　鶏犬　家を喪ひて分散せる後
林園失主寂寥時　林園　主を失ひて寂寥の時
落花不語空辞樹　落花は語らずして空しく樹を辞し
流水無情自入池　流水は情無くして自ら池に入る
風蕩讌船初破漏　風は蕩す　讌船の初めて破漏せるを
雨淋歌閣欲傾欹　雨は淋る　歌閣の傾欹せんと欲するに
前庭後院傷心事　前庭後院　心を傷ましむる事は
唯是春風秋月知　唯だ是れ春風秋月の知るのみ

この詩は白居易が親友元稹の死後、その旧宅を訪れて詠ったものであるが、『和漢朗詠集』（落花）にも採られた頷聯は、忠臣詩の前半二句の発想にヒントを与えたのではないかと思う。もちろん、両詩には差がある。白詩の頷聯に

おいては、両人が一緒に賞でたりした花や水は依然として落ちたり流れたりし続けて、邸宅の主人元稹の死を哀惜する自分の心情にこたえてくれないことが詠われることによって、元稹を失った白居易の悲しい気持がより一層感じられると同時に、元白間の友情の厚さも克明に描き出されている。そして、頸聯においては、元稹とともに遊んでいた讌船や歌閣などの荒廃ぶりが描かれ、元稹が生きていた間の元白両人の交遊の姿が自然に浮かび上がってくるだろう。

ところが、忠臣のこの詩は高少史の「傷二紀秀才一」に唱和して作られたものであるせいか、詩の中には彼と亡き紀秀才との付き合いの具体像、例えば白詩に描かれた四季折々の行楽を共に楽しむようなディテールなどが全く描かれていない。ここでは、白詩は単に表現のヒントの供給源にすぎないと言えるだろう。

一方、単なる表層の措辞の借用にとどまらない悼亡詩もある。次に掲げる「傷二高大夫一」（巻上・059）には、忠臣と亡き高大夫との密接な関係が描かれている。

昨日看朱紱　昨日　朱紱を看しも
今宵変紫煙　今宵　紫煙に変ず
矢辞弓可惜　矢辞れば　弓　惜しむべく
唇缺歯須憐　唇缺くれば　歯　憐むべし
恵死荘収礩　恵死して　荘　礩を収め
鍾亡牙絶絃　鍾亡せて　牙　絃を絶てり
贈君無異物　君に贈るに　異物無し
玉筯一双連　玉筯の一双連なるのみ

首聯は高大夫の急死を述べている。尾聯の「玉筯」は「玉箸」のことで、両眼の涙の長く垂れる喩え。一見この詩にも忠臣と亡き高大夫との付き合いの細部は描かれていないかのようであるが、実は頷聯と頸聯において、高大夫との交友関係に対する忠臣の認識や態度が語られている。『注』の指摘の通り、この二聯はいずれも白詩の表現を踏まえている。

頸聯の表現は、白居易が友人の崔玄亮（字晦叔）を悼む「哭二崔常侍晦叔一」（『文集』巻六十二・2966）に見られる「恵死荘杜レ口／鍾歿師廃レ琴」によったもの。[9]「鍾歿師廃レ琴」が、伯牙が鍾子期の死後、自分の琴の音を理解できる者がもはやいないとして、愛用していた琴の琴弦を切って再び弾じなかった故事を指すことは贅言を要しまい。「恵死荘杜レ口」は、荘子が論敵の恵施が死んでから議論を二度としなかったという故事による。荘子はある葬儀の帰り道に恵施の墓を訪れた時に、一つの故事を挙げて、彼と恵施

との関係を随行の従者に語りかけた。その故事は『荘子』（雑篇、徐無鬼）に見える。

郢人、堊もて其の鼻端に漫ること、蠅翼の若し。匠石をして之を斲らしむ。匠石、斤を運らし風を成す。聴して之を斲らしむ。堊を尽くせども鼻傷つかず。郢人、立ちて容を失はず。宋元君、之を聞き、匠石を召して曰く、嘗試に寡人の為に之を為せ、と。匠石曰く、臣は則ち嘗て能く之を斲れり。然りと雖も、臣の質、死すること久し、と。夫子の死せしより、吾、以て質と為すもの無し。吾、与に之を言ふもの無し、と。(10)

ある郢人（郢は楚国の都）がいて、自分の鼻に白土を蠅の羽のようにごく薄く塗って、その白土を匠石という大工の名人に削り取らせた。匠石は斧を振りながら風音を立てているうちに、郢人の鼻を傷つけずにそれを全部削り取り、郢人自身も終始驚き恐れることはなかった。匠石のこの芸当を宋の元君が聞いて所望したところ、匠石はその郢人が死んで久しくなったため、もうそんな芸当はできないと答えた。

この故事を承けて、荘子は右の傍線部のように、かの匠石が質を失ったことと同じく、恵施の死後、自分とともに議論する相手もいなくなったという感懐を述べた。ここの「質」を初唐の成玄英は「質は対なり」と注釈しており、つまり相手や対象を意味する。

こうして、原典に辿って、荘子と恵施との間は、論敵いわばライバルのような関係であると同時に、互いに真の理解者であったことが分かるが、荘子と恵施の間のこうした関係は、忠臣と亡き高大夫の間にもあったと思われる。

これは頷聯二句からも確認できる。この二句は白居易が劉禹錫を悼む「哭二劉尚書夢得一二首」（『文集』巻六十九・3601－3602）の二首目の措辞を援用しているが、ここでは二首とも掲げてみたい。

①四海斉名白与劉　四海名を斉しうす白と劉と
百年交分両綢繆　百年の交分両つながら綢繆
同貧同病退閑日　同貧同病　退閑の日
一死一生臨老頭　一死一生　臨老の頭
杯酒英雄君与操　杯酒の英雄は君と操と
文章微婉我知丘　文章の微婉は我丘を知る
賢豪雖歿精霊在　賢豪は歿すと雖も精霊在り
応共微之地下遊　応に微之と共に地下に遊ぶべし

②今日哭君吾道孤　今日君を哭して吾が道孤なり
寢門涙満白髭鬚　寢門涙は満つ白髭鬚
不知箭折弓何用　知らず箭折れて弓何の用ぞ

兼恐唇亡歯亦枯　兼ねて恐る唇亡びて歯も亦た枯れんことを

宿宿窮泉埋宝玉　宿宿たる窮泉　宝玉を埋め
駸駸落景挂桑榆　駸駸たる落景　桑榆に挂かる
夜台暮歯期非遠　夜台　暮歯　期遠きに非ず
但問前頭相見無　但だ問ふ　前頭　相ひ見んや無や

白居易は、亡き友の劉禹錫と己との友情を、二首目の傍線部に見られるような、相互に依存してかけ離れない弓と矢、唇と歯とのようなものに喩えている。そして、この二つの比喩を忠臣はそのまま援用して、己と亡き友の高大夫との親密な関係を描き出したのである。因みに、劉白間のこうした親密な関係は、一首目の頸聯には「杯酒英雄君与操／文章微婉我知丘」と詠われており、この二句の下にそれぞれ「曹公曰く、天下の英雄、唯だ使君と操（＝曹操）とのみ、と」「仲尼云く、後世、丘（＝孔子）を知る者は『春秋』、と。又た云く、『春秋』の旨、微にして婉なり、と」と白居易の自注がある。つまり、劉禹錫を劉備になぞらえて、同じく政治改革の思想を抱く両人の関係を劉備と曹操のそれに比況すると同時に、白居易は、劉禹錫の詩文の微妙・婉曲の素晴らしさを孔子が編纂した『春秋』のそれに喩えている。『春秋』を知れば孔子のことも理解できるように、自分は劉禹錫の詩文を通してその人をよく理解している、というのである。こうした互いに理解できる知音関係が、忠臣と亡き高大夫との間にもあったのだろう。

ところで、平安朝の文人たちに熟知されている劉白の関係[11]といえば、白居易が「劉白唱和集解」（『文集』巻六十・2930）で語っている両人の間の「文友詩敵」の関係に触れなければならないと思う。ここでは、関連する箇所を引用したい。

予、頃に元微之（＝元稹）と唱和すること頗る多く、或いは人口に在るを以て、常に微之に戯れて云ふ、「僕、足下と、二十年来、文友詩敵と為るは幸なり、亦た不幸なり。（中略）然れども、江南の士女の才子を語る者は、多く元白と云ふは、子の故を以てなり。僕をして呉・越の間に独歩するを得ざらしむるは、亦た不幸なり」と。今、老いに垂んとして復た夢得に遇ふ。不幸を重ぬるに非ざるを得んや。（後略）

白居易は戯れに元稹との二十年来の交際を、「幸」でもあり「不幸」でもある「文友詩敵」という関係で形容している。「幸」であるのは容易に理解されるが、「不幸」なのは相手の存在によって、自分が呉越の間に独歩することが不可能になるという、もちろん白居易の冗談である。そして、

こうした「文友詩敵」の関係は、劉白の間にもある。言うまでもなく、劉白間の「文友詩敵」のような関係は、先述した荘子と恵施の間の論敵関係と同じく、一見ライバル関係とも読み取れるが、実は互いに理解し合う知音同士であるべきものであろう。

高大夫について、蔵中スミ氏[12]は高階令範（よしのり）と推定している。氏によれば、両人は同じ時期に文章生であり、その後の官位の昇進もほとんど時を同じくしており、つまり両人は同期生ともいうべき親しい間柄である。この同輩の早世を悲しみ、彼との交友史を回顧した時に、忠臣の脳裏には劉白間のような「文友詩敵」の知音関係の交友像が去来していたのではないかと思われる。恐らく、忠臣は高大夫とよく作文や学問の上で、議論をしたり切磋琢磨を重ねたりしていただろう。そして、こうした劉白間のような交友像を忠臣はこの悼亡詩の中に投影して、自らの交友像を紡ぎ出したのである。忠臣が生涯にわたって、真の知音を求め、その友情を大切にしていることは、彼の詩の中に頻繁に出てくる「交結」[13]などの用語から知られるが、この高大夫もきっとその真の知音の一人に違いない。次に述べる詩作からも忠臣が知音を重視する態度が窺える。

三、忠臣の贈別詩にみえる交友

元慶七年（八八三）の春、五十六歳の忠臣は美濃介に任命される。その赴任に旅立つに際して詠じた贈別詩が三首残っている。その中の二首において、忠臣は都にいる友人たちとの離別の耐え難さを述べている。まず、「花前留二別同門諸故人一、各分二一字一、得レ音」（巻中・104）を掲げてみたい。

同衿歳久三分衿　同衿（どうきん）歳久しくして三たび衿（えり）を分つ
此度殊常別恨深[14]　此の度（たび）常に殊なりて別恨深し
向老看花多悵望　老に向かへば花を看るも悵望多し
離筵久少旧知音　筵を離れて久しくせば旧き知音少なからむ

この詩は、見送りに来た同門の友人たちに贈ったものである。転句の「悵望」は心を傷めつつ眺めること。後半二句において、年を取るにつれ、特に花の前のこの離別の後、今度京に帰る頃には、こうした昔なじみの友人たちも少なくなっていよう、と忠臣は悲しい感懐を述べている。

このような花の時に悵望することは、白詩にも頻繁に詠われている。しかも、その悵望の原因が詩人周辺の状況や詩人自身の境遇の変化とともに、次第に重層化していくこ

とに気づかされる。以下、順を追ってすこし挙例してみたい。

①「三月三十日題二慈恩寺一」（『文集』巻十三・631）永貞元年〔八〇五〕長安

慈恩春色今朝尽、尽日裴回倚二寺門一。惆悵春帰留不レ得、紫藤花下漸黄昏。

②「独酌憶二微之一」（巻十四・733）元和五年〔八一〇〕長安

独酌二花前一醉憶レ君、与レ君春別又逢レ春。惆悵銀杯来処重、不三曾盛レ酒勧二閑人一。

③「微之宅残牡丹」（同734）元和五年〔八一〇〕長安

残紅零落無二人賞一、雨打風摧花不レ全。諸処見時猶悵望、況当二元九小亭前一。

④「酬二元員外三月三十日慈恩寺相憶見レ寄」（巻十六・990）元和十二年〔八一七〕江州

悵望慈恩三月尽、紫桐花落鳥関関。誠知曲水春相憶、其二奈長沙老未レ還。

赤嶺猨声催二白首一、黄茅瘴色換二朱顔一。誰言南国無二霜雪一、尽在二愁人鬢髪間一。

①は詩人が三十四歳の作であるが、詩人が悵望しているのは、花が落ち、春が終わろうとすることである。詩人の惜春の気持ちのあらわれである。②と③は、江陵に左遷された知音の元稹を想いながら、花の時に昔のように一緒に花を賞でたり、酒を飲んだりすることができないのを嘆いて悵望する例である。④は親友の元宗簡（げんそうかん）に対する返詩であるが、この時点で白居易自身が江州に左遷され、老いに垂んとして、貶謫から脱却できない慨嘆がしみじみと感じられよう。

また、老年期の白居易は、「強飲翻悵望、縦酔不二歓娯一。鬢髪三分白、交親一半無」（巻二十・1318「郢州贈二別王八使君一」長慶二年〔八二二〕長安から杭州へ赴任中）や「相対喜歓還悵望、同年只有二此三人一」（巻六十六・3259「酬二鄭二司録……見レ贈」開成元年〔八三六〕洛陽）とあるように、衰老につれて知音の少なくなっていくことを嘆いている。

忠臣のこの詩は、特定の白詩を踏まえていないが、右に見てきたように花の時や老年に知音を思ったり、身の上を嘆いたりして「悵望」することは白詩に頻繁に詠われている主題である。これらの主題は、白詩に傾倒する忠臣には親しまれていたと思われる。

同門の友人らに贈ったこの詩のほかに、忠臣は、弟子かつ婿の菅原道真にも「春日留二別菅大夫一、探レ韻得レ春」（巻中・106）という詩を贈った。

傾蓋猶如骨肉親　傾蓋すること猶ほ骨肉の親の如し

交非深浅只因人　　交（まじはり）は深浅に非ず只だ人に因る
行前無限憐花去　　行く前に限り無く花を憐れびて去り
別恋菅家一日春　　別に恋ふ　菅家（かんけ）一日の春

起句の「傾蓋」は、『蒙求』に「程孔傾レ蓋」として見える、路上で行き会った孔子と程子とが車蓋を寄せて語り合って、旧知のごとき友情を結んだ有名な故事による。前半二句を試訳すれば、「君（道真）と出会って以来の親しさは、ちょうど肉親の関係のようなものだ。また、君との交誼は、付き合いの深さよりも人そのものによるのだ」となろう。換言すれば、忠臣は道真を心の許せる知己として扱っているのである。

このことは後半二句において更に強調されているが、転句について、『注』は「君と別れて行く前途は限りなく、遠く花が散るのを見てもいとおしく悲しい」と、『釈』は「これから（任国を指して）歩み行くと、その道のりははるかに遠く、この美しい花への未練を残して去ることになろう」と、「憐花去」について両書の解釈が分かれている。筆者は『注』の花散る説を採用せず、『釈』の立ち去る説に従う。

また、「無限」について、両書はともに前途を形容する言葉と解釈しているが、筆者は「憐花去」という動作を形容するものと思う。この転句において美濃に赴任する前の忠臣の離れがたい未練が詠われている。地方に赴任する前に、京の花や春を名残惜しくて別れたくない心情を、道真は讃岐に赴く前にも「欲レ辞二東閣一何為レ恨／不レ見二明春洛下花一」（『菅家文草』巻三・186「相国東閣餞席」）と詠っている。忠臣詩の場合は、都の花、特に菅家の花（と春）に対して限りなき未練を持っている。

もちろん、忠臣が殊に菅家に未練があるのは、単に菅家の花によるものではない。前半二句と合わせて考えれば、それは親友の道真との惜別によるものでもあろう。この詩の贈別の主題と呼応しているが、忠臣と道真との間に特別な友情があることも窺える。因みに、承句の表現の出典について、『注』は白居易の「平生親友心／豈得レ知二深浅一」（巻十・0465「寄二元九一」）を指摘している。元和九年（八一四）、母の喪に服するため故郷の下邽（かけい）に退居している白居易は眼病を患った上に、経済面でもかなり厳しい状況に陥った。こうしたなか、元稹は江陵に左遷中でありながらも、白居易に慰問の手紙を送ったり、経済支援をしたりしている。そこで、白居易は前記のような感慨を吐露した。この白詩の表現を利用して、道真との交友関係を詠じた忠臣は、次に述べる「花鳥共逢レ春」唱和詩群の中でも元白両人のよ

うな交友像を想起しただろうと思われる。

四、「花鳥共逢レ春」唱和詩群にみえる交友

仁和五年（八八九）正月、宮中で内宴が催された。詩題は「花鳥共逢レ春」である。この時、国司交替の手続きが完了しておらず、京で新しい任官を待つ忠臣[15]も内宴に参加して詩を作った。その後、外吏として讃岐にいる道真は、宮廷詩人として復帰したい思いを込めて同題の詩を作って忠臣に宛てた。この詩をはじめとして、忠臣と道真との間に、計四首の唱和詩が交わされた。いずれも「言・温・恩・門・園」を韻字とする次韻詩である。以下、順を追って原文を掲げたい。

①「聞下群臣侍二内宴一賦中花鳥共逢上レ春、聊製二一篇一、寄二上前濃州田別駕一」（『菅家文草』巻四・285）

花不含霊鳥不言　花は霊を含まず鳥言はず
知春為政調寒温　知りぬ　春の政を為して寒温を調へるを
幽渓転感求賢詔　幽き渓も転た感ず　賢を求むる詔
古木方驚養老恩　古き木も方に驚く　老いを養ふ恩
望鶴晴飛千万里　望まくは　鶴の晴れて千万里を飛ばむことを
思梅艶発九重門　梅の艶やかに九重の門に発かむことを
襃香低翅風渉地　香を襃み　翅を低る　風渉の地
争得時来入禁園　争でか時来りて禁園に入ること得む

②「奉レ酬乙讃州菅使君聞下群臣侍二内宴一賦中花鳥共逢上レ春見レ寄什甲　次押」（『田氏家集』巻下・133）

未堪芬馥応綸言　未だ堪へず　芬馥の綸言に応ふるに
豈是籠禽詩思温　豈に是れ籠禽が詩思の温まることあらむや
南郭槁株初著艶　南郭の槁れたる株　初めて艶を著け
北山傷雀擬酬恩　北山の傷める雀　恩に酬いむことを擬ふ
君魂花発馳宮掖　君が魂は花と発きて宮掖に馳せたり
我意鷗飛到海門　我が意は鷗と飛びて海門に到らむ
可惜翰華兼綵鳳　惜しむべし　翰華と綵鳳と
逢春不得共林園　春に逢ひて林園を共にするを得ざるを

③「予曾経以下聞三群臣賦二花鳥共逢レ春之詩上、寄二上前濃州田別駕一。別駕今之不レ遺、遠辱二還答一、詩篇之外、別附二書問一。予先読二消息一。詩云書云、不レ覚流レ涙。更用二園字一、重感二花鳥一」（『菅家文草』巻四・291）

自聞花鳥遠形言　　花鳥　遠く言に形るるを聞きてより
憶昔吹噓意気温　　憶ふ昔　吹噓して意気温かなりしを
心折細書千里面　　心折けて細書す　千里の面
舌饒長句万令恩　　舌饒かにして長句す　万令の恩
我悲凋落浮煙水　　我悲しぶらくは　凋落して煙水に浮かべるを
君嘆低飛宿草門　　君嘆かくは　低く飛びて草門に宿るを
努力明春求友到　　努力して　明春　友を求めて到りなば
一枝巣在旧丘園　　一枝の巣は旧の丘園に在らむ

④「菅讃州重答二拙詩一、頻叙二花鳥逢レ春之意一。四月晦、先使去。五月望、後使来。不レ遠二千里一、交二馳尺題一。更亦抽レ懐、押レ韻報上」（『田氏家集』巻下・135）

滄波縮地累嘉言　　滄波　地を縮めて嘉言を累ぬ
此日知君席不温　　此日知りぬ君が席の温まらざるを
望北花時思雪唱　　北を望みては花時に雪唱を思ふ
図南天外恋皇恩　　南を図りては天外に皇恩を恋ふ
梅霖兎月纔盈魄　　梅霖の兎月　纔かに魄を盈たす
海駅魚書再到門　　海駅の魚書　再び門に到る
不晩虎符還象魏　　晩からず虎符の象魏に還らむこと
莫能勤苦憶家園　　能く勤苦して家園を憶ふこと莫れ

本来、「花鳥共逢レ春」という句題では、春の到来と天皇の恵みが花や鳥など万物に及ぼすことが詠われるのが一般的であろうが、この唱和詩群において、そうした讃美的な基調は皆無である。新たな官職を得られない忠臣の不安定な状況や、不本意な国守の任にいる道真の境遇に鑑みれば納得できるだろうが、両人は自らの境遇を花や鳥に投影した結果、「花鳥共逢レ春」という公宴詩題のあるべき基調に背を向けてしまう。従来の公宴詩の枠を乖離したこの詩群では、忠臣と道真との交友像が浮き彫りになってくる。

まずは、忠臣がいかに道真の境遇を捉えているかを分析してみたい。一首目において、道真は自らの境遇を「幽渓」にいる鶴や「古木」の梅に見立てているが、こうした道真の境遇を、忠臣は二首目の首聯において、「籠禽」（籠の中の鳥のように不自由な身の上）という語でまとめている。この

「籠禽」の表現とイメージは、実は白詩にもしばしば見られる。以下、関連詩句を掲げてみたい。

①一為二州司馬一、三見二歳重陽一。剣匣塵埃満、籠禽日月長（巻十七・1073「九日酔吟」）

②網初鱗撥剌、籠久翅摧残（同1089「自二江州司馬一授二忠州刺史一……鄙誠」）

③忠州好悪何須レ問、鳥得レ辞レ籠不レ択レ林（同1090「除二忠州一、寄二謝崔相公一」）

④水梗漂万里、籠禽囚五年（巻十一・528「初到二忠州一……寄二万州楊八使君一」）

⑤両州何事偏相憶、各是籠禽作二使君一（巻十八・1154「答二楊使君登レ楼見レ憶」）

最初の三例は、いずれも白居易が江州に謫居中の元和十三年（八一八）に詠じたもの。周知のように、白居易は元和十年に江州司馬に左遷される。そして、ようやく元和十三年に、宰相になった親友の崔群（さいぐん）の助けで忠州刺史へ転任することになる。この江州貶謫の境遇を、白居易は自ら「籠禽」と規定したのである。忠州という辺鄙な地に転任するのは、白居易は実は不満足であったが、ともかく江州司馬という貶謫の身から脱却できるので、白居易は③の崔群に寄せた詩において「鳥籠を辞するを得れば林を択（えら）ばず」と詠じたわけである。

こうした不満足な情緒は、④と⑤の中にも表れている。この二例は白居易が忠州刺史に着任した元和十四年に詠って、友人の楊帰厚（ようきこう）に宛てたものである。この二例において、白居易は自らの境遇だけでなく、万州刺史に在任中の楊の境遇をも「籠禽」と規定している。このように、白居易は「籠禽」という表現で、主に江州司馬や忠州刺史といった不遇時代の境遇に喩えている。

そして、「籠禽」という白居易の自己意識を、忠臣は讃岐に転出している道真の境遇に当てはめ、道真を慰めようとしている。例えば、道真が一首目の尾聯で述べた「裏香低翅風莎地／争得時来入禁園」（この梅も香りを発せず、鷗も翼を垂れたまま雄飛できず、海風の吹きすさぶ讃岐にいる私には、いつか良い時が巡りきて宮中に復帰できるのだろうか）という、宮中の内宴に参加できない悲観の嘆きに対して、忠臣は二首目で「我意鷗飛到海門」（私は鷗のようにあなたがいる讃岐に飛んでいきたい）や「可惜…逢春不得共林園」と詠じて、同情や慰撫の思いやりを表している。また、三首目の尾聯「努力明春求友到／一枝巣在旧丘園」（明年の春に友鳥を求めて、一緒に都に到り着きたいと欲する鳥が、せめて都での一枝の巣だけでも元のまま丘園にあってほしいと願っているように、私

もひたすら自分の都での住処が元のままであってほしいものだ）という道真の思郷の念に対して、忠臣は四首目の尾聯で「不晩虎符還象魏／莫能勤苦憶家園」（間もなくあなたの国守の任期は満ちて都に帰ることになろう。そんなに都の家ばかりを思ってはいけない）と慰めている。

かつて焼山廣志氏は前二首の唱和詩に注目して、忠臣が道真の「低翅」を承けて「鷗飛」と詠じたのは、元白のある唱和詩の影響だと指摘した[16]。具体的には、元稹が白居易に宛てた「寄二楽天一」（『元氏長慶集』巻二十二）という詩の尾聯「安得故人生羽翼／飛来相伴酔如泥〈安くんぞ故人の羽翼を生じ／飛来して相伴に酔ひて泥の如くならんを得んや〉」と、元詩に対する白居易の返詩「答二微之見レ寄」（『文集』巻五十三・2327）に見られる「拍水沙鷗湿翅低〈水を拍つ沙鷗 湿翅 低る〉」と、この二箇所である。つまり、道真が白詩の表現を踏まえているのを読み取って、こんどは忠臣が元詩の詩想と表現を踏襲して道真への返詩を作ったのである。ここから、道真との間に元白のような交友関係を持ちたいと願う忠臣の気持ちが窺えよう[17]。

因みに、この詩群では一見、単に忠臣が道真を慰撫している一方のように見えるが、実はそうではない。前に挙げた⑤の白詩「両州何事偏相憶、各是籠禽作二使君一」の中で、白居易は己と同じく不満足な境遇にいる友人の不遇感と孤独感を理解し、互いに慰め合っている。これを道真の場合に重ね合わせてみれば、道真もまた白居易のように、忠臣の境遇に同情し、慰めているように思われる。例えば、前述した忠臣の「我意鷗飛到海門」の慰めに対して、道真は三首目の返詩において感謝ではなく、かえってそのヒントで「君嘆低飛宿草門」（雄飛することなく、草深い門のほとりに低迷している鳥のような身の上を、あなたは嘆いている）と詠じて、新しい任官を待つ不安定な状態にいる忠臣への同情の念を表明している。

このように、白居易が不遇逆境時代に友人たち（元稹なり楊帰厚なり）と慰め合っている交友像、ひいては白居易の生涯の交友文学の真髄を、忠臣と道真はともに体得し、そして、彼らの交友関係に重ねたのであろう。

【注】

（1）金原理「嶋田忠臣と白詩」（同氏著『平安朝漢詩文の研究』所収、九州大学出版会、一九八一年）、三木雅博「嶋田忠臣と白詩」（『白居易研究講座』第三巻所収、勉誠社、一九九三年）、新間一美「わが国における元白詩・劉白詩の受容」（『白居易研究講座』第四巻所収、一九九四年）など。

（2）本稿の『田氏家集』の引用は、原則として小島憲之監修『田氏家集注』（和泉書院、一九九一～一九九四年）によるが、中村璋八・島田伸一郎『田氏家集全釋』（汲古書院、一九九三年）に従う場合もある。そのつど注記する。訓みくだしは、両書を参考した上で私的に施したものである。以下、両書をそれぞれ『注』と『釈』と略する。なお、両書の通し番号は同じであり、それに従う。

（3）「故令」二字は私案ではあるが、『注』も『釈』も底本の「故今」を採らず「教令」に校訂する。

（4）白詩の引用は岡村繁『白氏文集』（新釈漢文大系本、明治書院）に従ったが、訓みくだしは数カ所改めた。括弧内に花房作品番号を示す。

（5）因みに、張籍のこの詩に対して、裴度も返詩を作った。また、張籍あるいは裴度の詩に対して、白居易のほか、当時の大文人たち韓愈・元稹・劉禹錫・李絳・張賈らも唱和詩を作ったが、忠臣の当該詩は主に白詩の影響を受けていると思う。

（6）『扶桑集』巻七に「哀傷部」という部門があり、その中には更に「悼亡」「哭児」「墳」「病」「嘆」と五つ分けている。「悼亡」という分類には、菅原道真の「傷二藤進士一呈二東閣諸執事一」や「到二河陽駅一有レ感而泣」などが収録されている。この二首の詩はいずれも妻の死を悲しむものではない。

（7）「泉途」は冥途、黄泉の国の意。「途」は『釈』の意改。『注』は底本の「逢」のまま。筆者は『釈』の案に従う。因みに、『釈』が指摘していないが、『文選』（巻五十七、謝荘「宋孝武宣貴妃誄」）には「皇帝痛二掖殿之既閟一、悼二泉途之已宮一」と、『菅家文草』巻二・100「喜レ被三遥兼二賀員外刺史一」には「月俸曾因レ含レ哺飽、泉途更欲二計レ恩詶一」と、「泉途」の用例が見える。因みに、本稿の道真の詩文の本文は、日本古典文学大系本『菅家文草　菅家後集』（川口久雄校注、一九六六年）による。

（8）亡き人を悲しむ涙が雨となって冥途まで流れてゆくというような発想は、『古今集』巻十六「哀傷歌」の巻頭を飾る小野篁の「泣く涙雨と降らなむ渡り川水まさりなば帰りくるがに」を想起させよう。

（9）忠臣詩の「恵死荘収礩」は白詩の「恵死荘杜口」を模倣したものに違いないが、「礩」（『広韻』に「礩、柱下石也」とある）では意味不通のため、『注』と『釈』は諸本の「礩」を採用せず、後述する『荘子』の故事によって「質」に改めた。しかし、「質を収む」（質は相手や対象の意）という表現は依然として意味が通じないと思う。本稿では、しばらく「礩」のままにする。一方、「絃」との対句関係から考えれば、『初学記』（交友）の事対に「伯牙絶レ絃　鄙人運レ斤」

とあり、また初唐・駱賓王の「夏日遊二徳州一贈二高四一」に「成レ風郢匠斫（斲）／流レ水伯牙絃」とあるように、同じ『荘子』の故事に見られる郢人の斧を意味する「斤」（平字）もしくは「斫」（仄字、「斲」はその異体字）は一案としては可能かと思う。しかし、「恵死荘収斫」のように郢人ではなく荘子が斫を収むといった言い方はやはり不自然であろう。後考に待つ。

（10）引用文は新釈漢文大系本『荘子』（明治書院、一九六七年）による。

（11）前掲新間氏論文と三木雅博「平安朝における「劉白唱和集解」の享受をめぐって」（『白居易研究年報』第2号、勉誠出版、二〇〇一年）参照。

（12）蔵中スミ「嶋田忠臣年譜覚之書」（前掲『注』巻之上所収、初出は一九七三年）参照。

（13）後藤昭雄「嶋田忠臣論断章」（同氏著『平安朝文人志』所収、吉川弘文館、一九九三年）参照。

（14）「恨」は本来欠字。『注』は「意」を補ったが、「別恨」などの可能性も提示しており、筆者は「別恨」を採りたい。因みに、『釈』も「別恨」を採っている。

（15）後述する三首目の道真詩の尾聯の「別駕先年罷レ官、未レ得二放還一」という自注から知られる。

（16）焼山廣志「菅原道真の詩に投影されている白居易・元稹の唱和詩について（その一）」（『九州大学国文』23、一九九四年七月）、及び「同（その二）」（熊本大学『国語国文学研究』32、一九九七年二月）参照。因みに、この唱和詩群の梅に注目した波戸岡旭氏の「島田忠臣との応酬詩にみえる梅花」（同氏著『宮廷詩人菅原道真――『菅家文草』・『菅家後集』の世界』二三二頁以降）の論がある。

（17）もちろん、道真と忠臣の唱和詩の基調は、元白のそれといささか違和感を覚えさせる。当時、元稹は四十六歳（越州刺史）、白居易は五十三歳（杭州刺史）。世の中は依然として騒がしいけれども、人生の波瀾を乗り越えてきた二人は、だんだん心静かに老年へ辿り着いている。こうした心境の下に交わされた元白の唱和詩の基調は任地の優れた風光を楽しむものである。例えば、元詩の頸聯「氷消二田地一蘆錐短／春入二枝条一柳眼低」は早春の風光をうたうもので、『和漢朗詠集』「早春」部の劈頭に飾られている名句である。しかし、忠臣と道真の唱和詩が白居易の交友文学の影響を承けているのは間違いないと思う。